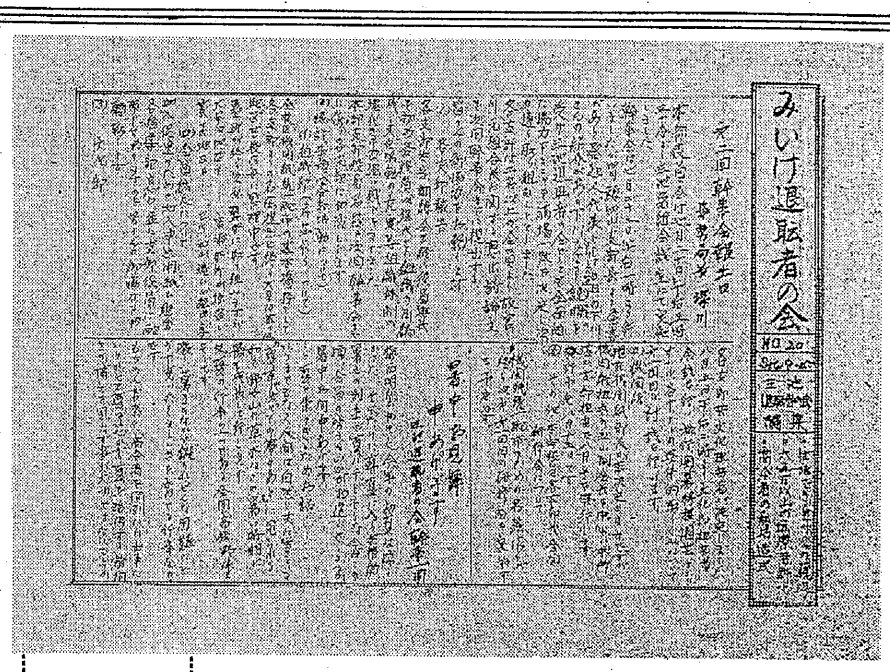


三池退職者の会が発行する新聞・高齢者の老後保障の確保・拡大のため活動している。

定年後はとも働きで

坑外特務工A（54歳）の一人　退職後の生活設計を語る

高年齢の組合員にとって、定年退職後どう生きていくかが、いよいよ重大な問題となってきた。定年後しあわせに生きることは、それこそ働く者の当然の権利であるが……。次は、坑外特務工Aで働く仲間の退職後の生活設計。

私は、昭和五十五年一月二十五日、勤続三十六年三カ月で定年退職になりますが、今秋の退職金闘争は私にとって、最後の重大な闘いです。是非とも、大幅な増額を勝ち取らなければなりません。

今では、五十五歳からは老後だとは思われず、まだ働く意志をもっています。けれども、働くには体が資本で、思うように働けるものかどうか、先々のことが不安です。退職後は、六十歳まではどうしても働きたいのですが。

現在ではげしい労働作業は無理で、先輩や知人に聞いたところによりますと、退職後の者としては月に七万円から七万五千円が精一杯のかせぎのようです。

私には実子がなく、妻と二人でこれまで生活してきました。退職後は、私達は弟夫婦に加わり、四人での生活設計を考えています。

弟嫁と妻が二人で、荒尾に土地を借りて、パーマ店（佐村美容院）を開くことにしています。来たる九月七日にオープンとなるようです。私の退職金は、全部そのために消費して、弟と私は二人とも働きに出るつもりでいます。

私は坑外特務工Aで五十四歳。妻が五十三歳です。

60歳までは職探し

港務所退職者　上田歳正

手記

港務所を定年退職して、早や二年。今日ほど、「失業」ということをしみじみ感じたことはありません。

会社にあったときは、退職しても夫婦がどうにか生活できるだろう、子供達も大きくなって、それぞれ独立した生活ができ、孫もできて希望のもてる毎日となるだろう、と思っていたのがどうでしょうか。

低賃金・重労働を覚悟して、水道の配管作業にやっと就職し、毎日福岡市まで出勤していたのに、約四カ月でその仕事が終るとまた失業。仕事探しに明け暮れる日々です。

期待していた炭鉱年金・港湾年金も、見棄てていってしまった。粉塵にまみれて、港湾荷役の機械運転、汽車の運転に四十年間も勤めたのに、港務所だけが企業年金の給付もないとは……。これも組合分裂のおかげ、と誰かが喜んでいることでしょう。

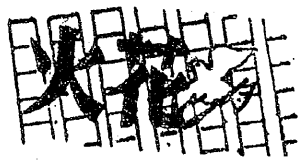
なんといっても、厚生年金が支給される六十歳までは、健康を保ち、職を求め、生きるために頑張らなければ、と切実に思っている私です。

×

上田さんの手記は、「みいけ退職者の会」（三池退職者の会発行の新聞で、NO・20）から。

いきいきと生きる　三池の人々だった

荒尾　神代久美子



私が「三池にまなぶ婦人集会」に参加するきっかけになったのは、学習会を一緒にやっている坂東さんに勧められたからです。

坂東さんが家に来て、主人と色々活動の話をされるのを、かた寄った活動好き、持って生まれた性分が自分とは違うと思っていました。でも私も、そうなりたい、いきいきと生きてゆきたい、と思いっしんで、自分をムチうち、参加へと事を運びました。

一日目は、参加しておられる婦人活動家に圧倒され、自己紹介では職場を持たない私が小さく見えては、取り残された気分になり、ユーウツでした。

二日目は、七夕社宅に分散した六人の人達とは、前夜社宅の風呂に一緒にはいったりしたので随分気安くなれましたが、分散交流会などで職場の問題を聞くと「ヒドイナー」と思っても、自分のこととして受け止めきれない弱さがありました。

その夜は、三池労組員との交流でした。その中で、五十を越えておられるだろうと思われたある鉱員の方が、「現在、坑内の保安のため、現場での仕事中もメモと温度計を持ち回り、危険と気づいた個所などはその場でメモし、三十度以上のところでは仕事をしないように申し合わせている」、といわれましたが、毎日が闘いなのだと思いました。

その方は、「第二組合へ移った者は憎い。けれど、社会主義の世の中を作るためには、仲間として手をつないでゆかねばと思い、仲良し運動を続けています」、ともいわれました。失礼ながら、五十過ぎの鉱員さんを頭に描くときは、もっとどーっとした、酒好きなおっちゃんを想像していたのに、ほんとうにきれいで、「真っすぐに、美しい未来をゆるぎなくみつめていた……」、という詩をとっさに思い出しました。このさわやかさは、奥さん達にもありました。いきいきと生きている人達が、ここにも居ました。

社会主義への展望を見い出した人達の、自信にあふれた顔。着ていられる物は粗末でしたが、ステキでした。私もこう生きたい、と思いました。

山下さんの奥さんも、「財産は何もないけれど、二人の子供の仲の良いことと主人が財産です」、といわれましたが、自分の進むべき方向ははっきりしました。

これから先ずっと学習を続け、学んだことを生活に結びつけ、自分自身しっかりと生きてゆこうと思います。一歩でも、前進し続けたいと思います。

×

右の手記は、大牟田市中白川二の九八にお住まいの、山下開さんとその妻久子さんに寄せられたものです。ありがとうございました。

なお、神代久美子さんのお住まいは「荒尾市蔵満三七二」です。

△　▽

貯炭の山は宝の山だ

どこへいった、生産制限

三川鉱の繰り込み時間の変更で、電気（坑内）は昇坑が三十分間早くなり、時間的には好都合になりましたが、ロッカー室や浴場の混雑はやりきれません。

夏場になり、坑内も更に高温となり、ぐったりして昇坑するとこの混雑。気分がすっかり滅入ってしまいます。

それよりユーウツなことは、交代時間帯作業での残業が多くなったことです。

不思議に思うのですが、会社は昨年秋頃から貯炭の山を理由に、残業や公休出勤の規制を言い出しておきながら、残業を強制しなければならぬような繰り込み時間変更を、なぜしたのでしょうか。生産制限、残業規制は掛け声ばかりで、採炭、掘進は残業に追いたてられ、最近は、一番の人車で昇坑する採炭員を見るのは珍しい実態です。

「貯炭の山は赤字の山」とは、賃上げを百五十円（一方で）で、またボーナスを三十四万八千円におさえこむための宣伝であり、働く私たちをあざむく言葉だったに過ぎず、ほんとうは、貯炭の山は「宝の山」だったのです。

残業をよろこぶ人もいますが、残業はイヤでイヤでたまらない人が多いのです。事実また、残業してもそれは労働時間がふえるだけのことで、出来高は少しも多くなっていないのが、全職種に共通したことです。

「貯炭の山は、黒い（黒字）山流」（八月一日発行）から。

三川指導部電気分会新聞〝交減〟って、八月現在では百七十四万トン前後あった貯炭は、今はずっと減って、八月現在では百七十四万トン余り。かっての約半分ほどになっています。念のため。

（編集部）

随想

あれから十六年

今年春、頭痛は激しく長かった

退職者　木村守

健忘症。頭痛。カルテには書かれていたものの、「尿に出ません」、の医師の一言が、三川鉱大爆発の救援作業者一斉検診の結果（私病取り扱い）で、その後も診察を乞うその都度、「尿に異常なし」。頭痛、健忘症はますます募るばかり。

向かい合って話している相手を何時の間にか、「この人は誰。何をしに来ている」、と忘れることたびたび。

当時、PTA委員をしていて、学校の行事に出席の名を書いていて隣家の人の名を思い出せない。相手は「頼みます」、で行ってしまう。○を書き並べるより方法がない。

それまで、好きで作っていた短歌も手にすることができず、参加していた各結社に退社届を出し、悶々の日を送り重ねる。

五年、六年の月日が、人間性確立への努力がか、激しい頭痛も春秋の定期便的に移行して来る。

四十六年になり、やっと好きな短歌作活動に手をつけてみる。しかし、八年のブランクというより幼稚時代への逆もどり。周囲の暖いはげましに、会社で受ける腹立ちを短歌の中にぶっつける。

毎年起きる春秋の頭痛に、今年は少し早い、今年は少し遅いと、あきらめに似た思いを繰り返してきていたが、今年の春の頭痛は激しくて長かった。

「木村さんには、これしか効きませんものね」、と言われて貰っていた薬の二次害。体全体に出たかぶれ。

三月十七日に頭痛発病。三月末にはかぶれが重なり、「どうかなりませんか」と、医師に弱音を吐きかける。

四月が過ぎ、五月半ばを過ぎて煎薬、くすり風呂の家庭療養も効あってか、五月末になりようやく生きた心地に還る。

還歴の今年、体の衰えはどうしようもないものか。今年のような頭痛が、これから先毎年襲い来るものか。

短歌

おのれに自信をもてと修業女僧をさとすわれの励みに

×

木村さんは、明らかに三川鉱大災害に被災しましたのに、何の取り扱いもうけずに今日まできました。